德本上人行狀和讃

188.76
To427t
W

国立国会図書館　タイトル『德本上人行狀和讃』　請求記号 188.76-To427t
ガラス使用

8.11.76
To427t

帝国図書館蔵書
国立国会
29. 7. 22
図書館
336562

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

名蓮社號譽上人稱阿弥陀佛

徳本上人

徳本上人行状和讃

一心帰命阿弥陀佛

幾萬年ゝ末までも

挑て今乃世に聴す

ちげうに尋ゝとれバ

三管領ゝその中ゝ

尾張の太守政長乃

十方衆生の佛ちうゝ

聞くゝ法のとりゝを

徳本行者の行状ゝ

父ゝ足利将軍忠

家名もたゝゝ畠山

九代乃正統田伏氏

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

母塩崎氏懐姙は
身心乃ちきその儘み
もののはきハ宝暦七
紀州日高の志賀谷村
汚血乃不浄かつてなく
異るにおひ薫じまバ
生まれ丈夫に有様也

蓮華氏の母と夢を見て
ことし月日の満しる
八ときこえ寅の夏
久志丸農家の誕生は
ゆやすすこてる水ぞう
人皆奇瑞と稱しる
頭項の骨格ひいでく

深眼重瞳人に
左右の手ハ十字をバ
唱て二歳に秋の夜ま
あれのくさるとゝもせを
南無阿弥陀佛と稱せる
はつし初とぞ学へる
隣家に童児虎之亟

はあとに老う瞳
握りし相も異標なる
姉なる人の満月に
頭にめぐし誕生
あまぎ上人念佛に
その後四歳乃私の未
俄乃無常をきくよりも

母堂より聞給へ
何きの所より
定免る世の
浄土を
拙れども常に
笠城後光と
小高き所に

まれのかくもるぶべ
母堂の答は老少
弥陀に頼て極楽の
一言肝に銘せしや
わすれぬのみ折
まは摂取の印結び
まれ即仏とよろこ

高聲念仏の戯は
元祖大師や弾誓の
乳房を離れて
きびしく長て日
精進潔斎
道の心は増長
法の林に

天台大師や吾宗の
かしこ跡に倣
葷肉不浄の食物を
夜食も断て
いとぎ
暇の浮世を
菩提の花の

心の内を申げ祈願
奉れ志願を述べども
許容はうけくみうろう
胡鶏鳴乃念佛乃
樓寢をせどとられ
この時もうとうれうう
まげ門奉れ涙ある

九才は母は姉と親よ
嫡男ゆよ願乃
十六歳の春ようは
時はたごつを怖れ泣
夜石臥の行状を
毎時念佛の始は
治て身口をきよめて

三

懺悔發願祈んで後よ
線香四本を一時とす
大龍川の月正寺
大良和尚と諸共よ
心行策勵せられる
稚く好相の現ぜ
かる人をばいはまでも

高聲念佛の生活後
家業は服を洗る時も
人塵出の境に入り
おりく別時念佛
かく年月経る後よ
母堂初そろに拜見
俗家の庵よ埋を

四

冥衆に照覧をとり
師八年来の志願をば
姉なる人よ財産を
いと惜んで給よ頼をば
往生寺に投帰して
二十ばかり六つに夏
法の袂をすぐしたる

はるよ出家を許されし
時節至りて遂るとて
譲りて母の孝養を
家をばとてく宮人村
大国和尚を師と頼
翠に黒髪をうちはらひ
世にあき風の吹渡て

身をおく山の草の庵
須ケ井に峯と千鳥川
近江の国乃丸茅野の
岩間や樹下を端座して
頻ひまなくして天の戸に
心を西よりうつせしの
南無阿弥陀仏の外に

露に命も惜うしば
結びし法和を紀伊の國
津の国住吉猪尾山
人蹟絶たる孟雨雲
墨衣本色世の中乃
あくがるるもわすれつ
もの付果てる身こそは

336562

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

雖波のことゝゆるざるに
一方ならぬ感應あり
大身現して金蓮の
来て聲頂しるの紙
或は佛間の花生よ
わひなく花のもく頃
朝陽よりも如くう

されば在家の昔より
持佛は本尊おりくよ
佛見ほうで師の浮に
毋堂も昔よ感見を
時もゆるぬ蓮集は
光明頻よてこに事
ゆる念佛の折かゝみ

心地ゆるも大猶乃
廓然無相は實體を
ゆゝ念佛のわるかゝよ
現せしるもゆるとゝや
日輪大虚よ遍滿し
聖境四とゝ勝れゝ
稚綱教授しもへば

底打授しどくあく
得られしるもあるとゝん
真言秘蜜は曼陀羅の
自誓受戒は感相よ
兩華亂墜は樣を
善導大師あるまく
餘經の文もとのぶゝ

あらたまらるゝ秘密儀を
和上の證明受てこそ
圓光大師現ずては
授けもつも外形ぬ
この一枚を上人乃
ゆうすゝぎて吉水の
一文不知ハさのひを

これ是ぞ真に得戒也
戒品具足しぬる
浄土の奥義は一軸を
一枚起請に文ちかや
心行業の鏡あらく
あられを清く汲渡て八
外を頭船のうち任せ

たゞ往生の信水を
すまする外八外をゝ門
構檀林に場を掛け
法ゝ説ゝ惑ゝ求よ説て
演説の言葉いはゝ
會座に大衆も雲集の
地蔵菩薩のおりくを

南無阿弥陀佛の月輪を
墨を染てゆゝぎ
法門相承せゝる時
祖師の直受に相傳
宗義の肝心あらはれ
秘法ゝゝ人でゝ
来現あらく法門

深秘を悟る事なれ
若地蔵菩薩上人へ
海を渡る時は地蔵菩
一微塵の當體を
名號書寫の硯より
天神地祇は影向を
垂るのみならず稱名乃

師八者窮子我八子れ
上座を讓り給へ
世界は遍滿し給へ
菩薩の姿ぞ圓滿す
舎利の現ぜるもみな
述るもいとまもなく
行業成して碍なく

浄土乃依正を感見し
七重寶樹の風も声
音響音忍ぶこと
利物は縁もなば
桃李の花もりのいそで
剃髪染衣はまだ
何と後世も山奥も

八功德池の波の音
娑婆は居ながら
自證の程をたのもれ
機を聞く情八ゐれた
衛を
うき世は路も雲の
者賤道俗もまた

いろいろ市井めくうり
数萬の道俗群をなす
門れとくみたをあふま
教化の濃き言葉を八
をなるをて一さとりよ
種々に現験いちじるく
為得大利の祥瑞を

讃ず起くさを称ずまは
同音念佛のをを称を
胸を叩くを悲の
いかるる嘆き心根も
往生浄土を願ふ人ぞ
時に臨終正念乃
ゆきを国をを国をて

雲のうくり武蔵の
ゆくるぞ数形き
無量山中大佛殿
都下れ老若群参
幾千萬の数をを
精進潔齋する人を
道儀を慕ゆきり夫

紅葉の未だ
津の国摂尾東都を
月ゆ三度の摂化を
日課念佛を拝をの
剃髪出家れ式をけ
その数あけてをうが
現在をを質をば

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

木に彫り紙に摺りて六
万部書写めくるるもの
書写の名号請求め
はずまぬるハ少
蝦夷松前の奥までも
日課誓受け印信よ
幾万信ぬ及びけん

戸に祭りく仏神を
古今未聞の事ぞとよ
社衆を結んで浄業を
筑紫のそより東は
いまぬ里もなり名を
授与まつる名号を
其の名号は此の

放光現瑞
消除ハ耳
穢生せしめて
順次生げ
単直愚癡の身
智者學問も信伏し
弟子と稱して吉水に

降命終の災障
或ハ真途の苦を
心行具足の身
その教ひ
道理を述る言葉
諸宗の高僧座
流に入る

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

高貴の宮房權門の
伏して淨土の門に入り
夕日の宮よりかたぶく
利劍即是の名號を
後世をねがと勇力成
持もく上人発心
一所不住をこのみて

忠臣節婦も師の德に
朝暉をあをぐ心根を
猶欣心の旗をひるげ
執持して二世の名聞を
勵す人もまたかたし
意業は頭陀をゆびて
うき世の中に後掛の

何国も誠の心地ぞと
東の都より来りては
ひのもとの諸国の民に
信の芽を生ぜしめ
重き年貢を業とせ
城北巣鴨鶏聲の
一行院に留錫し

跡定ぬ身なれども
あぐ山地に跡を留め
法の潤ひ施し
二世の安樂願させ
輕き心もたのもしく
丘あるべの天曉山
自坊と定て隨縁の

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

摂化をもろくせられた
靡ぬ草木もかりきり
有為の境はけうるれハ
久住しるよ道もなく
世上の名聞さそひきて
秋の晩よいてうてを
化導の粧あづきなく

徳風あるものをがれく
されど生者必滅乃
きとひめがるる大撞も
泉下に流すこやうれ
絡よ文政元年乃
機縁も今ハ尽きしとそ
痛の涙ハ尽きあの

九月後の三日より
家後の遺誡懇勤
尊貴の帰依の方に
一佛浄土の再會成
うたく悲感を堪しゆう
開眼供養の言葉ハ
導師とかりく一切の

ゆるを待く外ることを召集
外護の擅越その外に
あの〳〵永訣しのひく
ゆゝ細やうに言あすよ
此時上人中尊像成
まれ是迄ハ念佛の
衆生成教化せしゆう

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

因縁法きて今はもや
汝よ請りはるよりより
一切衆生は極楽へ
まゐゝ祈んごろに遺属し
この本願を我真と
急ぐ〳〵ぶんバを修くの
ゆゑ在命の異ゆゑ
浄土に詣れば職方紙
以業は我ゆゑ代
引導せさせ給へよ
対るよ對して向後へ
おのゝて供給念仏
霊験ほどこ〳〵給ふ
乗く遺託せられり

常座五臥の行状を
六日のゆゝさ常座の
その後は縄床とり除
滅度の行儀はゝぶれて
念〳〵石捨の稱名は
高聲無同體をせむ
青聲枯渇ゝまよ

十月五日の夕べまで
弟子を集て永訣し
頭北面西釈尊乃
始く年臥せられる
未の下刻ゆるまく
近頃疫疫はくして
この日にいたりはよ

金鼎の聲は道朗より
申の刻よりぬれば
生死輪廻は根を断ち
三十一文字を書きて
所労場の傍の姫より
菩薩聖衆も来れ
あの四五月八日の室に

勇進せる室に奇異
筆採りて南無の弥陀仏
身をも命もたしまぬと
遺偈とそへ書く
諸天神祇も影を場
擁護しの耳うべ
浄土の荘厳籠こと

煙より現前し給へく
第子某より来きて
こそで現其人前は
たちは祥瑞を纏て
雲の近ひの志しるは
すでよその日も入相の
頃は南無阿弥陀仏

真の曼陀羅はそと
化仏菩薩尋聲到
如来周位の誓願の
心よそる此系の
漏刻志バ推移り
時の箸もたえそく
ものそらはのもり年紀

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

此世の限りとのゝしく
念仏の聲と諸共に
十月六日の初夜の風
長夜の闇を消す人
菩提の路ふみ迷て
さく紅葉し人くれ
鶴の林の夕の月

深禪定に入るごく
浄土に歸入ぬり
法衣焼ふきたるぬ
されたりて真光の
無始の迷ぞるきゝん
なげきかゝ
雲かれ

かくやひらんといみじの
總て上人の代の
濱の真砂の數なく
筆の林はつくすとも
いかや恩德を報ぜんと
一滴まもるりゝん
信じて一心專念の

きゝ
今ぞ
自他眞顯の得益を
ひ硯の海を干し
いでゝ墨をすべき
かく水くきは德海の
斯る知識をへ
淨業石退の輩は

臨命終時夕遥まへ　聖衆ひきつれ来り給ふ

妙なる音よりきこえよの　眠をはなれ極楽の

九品の蓮の臺みな　一如の月の光をば

詠んるの嬉しさよ　南無阿弥陀佛〳〵

文政三庚辰年晩秋日

天暁山藏板

調進所　傳通院御門前白壁町
雁屋七之助

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』　請求記号 188.76-To427t　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『徳本上人行状和讃』 請求記号 188.76-To427t
ガラス使用